SSW　Vacation

瀬戸律久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＳＷ　Ｖａｃａｔｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ５７３７Ｒ

【作者名】
瀬戸律久

【あらすじ】
好奇心旺盛で行動力のある不良の友人にいつも付き合わされる主人公。そんな2人が色々なモノを追いかける。
知ってますか？工業高校って不良もオタクも関係ないんですよ。

夏休み突入に伴い、計画を立案？

最近、中高生の間でとある噂が広まっている。その内容というのが、

とあるＨＰの掲示板に殺したいほど憎んでいる人の名前を書き込むと、極々まれに
「代わりに殺してあげます。」と、いう返信がある。そこで「お願いします」と返す
と、次の日、その相手が死ぬ。

というものらしい。
所詮、僕も友人から聞いただけなので詳しいことは知らないけど、ただの根も葉も
ない噂話だと考えている。実際に、その掲示板に書き込みをしたら返信があった。と
か、あの事件の被害者は、この掲示板に名前が書かれていた。とか、そんな話もある
らしいけど、それも全部ウソだろう。
本当にそんなコトがあるのなら今頃、大騒ぎで警察も動くものだろう。
まぁ、秘密裏に警察が調べているとか、なんとかっていう話もあるみたいだけど…。

そんなどうでもいい話を聞きながら、学校までの道のりを急ぐ。
普段なら急がなく
ても間に合うのだけど、今日はギリギリ。その理由は、

「だからさぁ、そのＨＰ探して噂が本当かどうか調べようぜ。」

などと、人の自転車の後ろに乗りながらバカなコトばかり喋っているこいつ、、秋山圭吾（あきやま けいご）が寝坊したせいだ。

寝坊した理由が「今日から夏休みだと思ってた」だから最悪だ。夏休みは明日からだ、バカ。

しかも、悪いことは重なるもので今乗っている自転車は僕の６段変速の物ではなく、圭吾の物で変速機も付いてないただのママチャリ（ヤンキー仕様ｗ）だ。

はっきり言って乗りにくい。

なんせハンドルとブレーキレバーの角度が異常なのだ。

僕の自転車もハンドルの角度を変えてはいるけど、このハンドルの角度はあり得ない。ほとんど地面に対して垂直じゃないか。頭おかしいだろ。

こういう時、バイクで通学できたらなぁっと思う。

うちの学校は、田舎の学校には珍しく免許の取得を許されている。ただし、いくつか条件があり、そのうちの１つが「バイクで通学しないこと」である。

普通に考えれば誰も守りそうにない条件ではあるけど、意外と皆、守っている。

バレたら退学っていうのもあるかもしれないけど、通常、許可してもらえないものが、許可してもらえるのなら、その程度の条件ぐらいは呑もうか、

という考えが大半
である。
規律（ルール）というのは適度に緩い方が、良いのではないかと思ったりもする。
僕の後ろに乗って未だバカなコトを喋り続けている、こいつも守っているし。

しかし、さっきからうるさいなぁ、人の気も知らずに。
「わかったから、話は後で聴くから少し黙ってて。」
僕はそう言って、ペダルを漕ぐ足に力を込めた。

頑張った甲斐あってか、どうにか遅刻せずにすんだ。
その後、終業式を終え、夏休みに関する諸注意などを担任の教師から聞き、夏休み
に突入した。

「で、朝の話なんだけど、どうだ？調べてみようぜ。」
ちっ、覚えていたか。学校では何も言わなかったから、忘れていたと思っていたのに。

「そんなことより、昼ごはんどうする？どこかに食べに行く？」
「ん？あぁ、そうだな、コンビニで適当に買って俺んちで食わねえ？今の時間どこも混んでるだろうしさ。」
「そだね、そうしようか。」
「で、飯食いながら会議とでも洒落込もうぜ。」

お前の中では調べること決定なのかですか。そうですか。
まあ、夏休み入って時間はたくさんあるわけだし、やることも無く1日をベットの中で過ごすよりマシかと思い、圭吾の話に乗ることにした。

夏休み突入に伴い、計画を立案？（後書き）

ほとんど勢いだけで書いたので主人公の名前がまだ…。

感想などをいただければ喜びます。

調査開始

「そういえば、あの話には続きがあるんだよ。」
続き？何それ？
コンビニで買い物を済ませた後、圭吾の家に向かう途中で圭吾はそんなコトを言う。
「続きってなに？」
「忘れた。」
やっぱり、こいつバカだ。
「いやあ、ここまで出てきてるんだけど」
圭吾はお腹をトントンっと叩いた。
それ全然出てきてないじゃん。普通、喉あたりまでだろ。
なんなんだよ、こいつ。ちゃんと調べる気あるのかよ。
「うーん、なんだったっけ？」
人の後ろでブツブツと呟いている圭吾を無視して、僕は僕なりに噂の真相を考えてみる。
この手の話には、話の元になる「何か」があるハズだ。ここ数年間の事件や事故とかを思い出してみるけど、どれもピンとこない。
たぶん、ニュースにもならないくらいのコトに尾ひれ背びれがついたのだろう。
それに、事件や事故がきっかけじゃない可能性も考えれば、かなり難しいじゃないのだろうか。
うー、困った。

僕はなんとなく空を見上げた。

圭吾の部屋で食事を済ませ、ＰＣの電源を入れる。立ち上がるまでの少しの時間、気になっていたことを聞いてみる。

「で、話の続きは思い出した？」

「へ？続き？」

「さっき言ってだろ。あの話には続きがあるって。で、思い出せたの？」

「あー、はいはいそれね。全然思い出せません！」

圭吾は胸を張り、自信満々に答える。

お前、思い出す気ないだろ。

僕が聞くまで忘れてただろ。

ホントになんなんだよ、こいつ。

僕１人で調べた方が早いんじゃないのだろうか。

圭吾のコトは放っておいて、僕はインターネットでここ数年間の事件や事故を調べてみる。

僕だって全部の事件や事故を知っているわけじゃない。ニュースになるような大きいモノ以外はわからない。

こういった時、本当に世の中便利になったなあっと思う。

うーん、どの記事を読んでも話の元になりそうなモノはないなあ。もっと前も調べてみたほうがいいのかな？

ＰＣの前で腕を組み、悩んでいると

「ＨＰ見つかった？」

ベッドの上で横になりゲームをしている圭吾（バカ）、が能天気な声で聞いてくる。

っていうか、お前も調べろよ。お前が調べようって言ったんじゃないか。
こいつ、ホントにやる気あるのか？
「ん？あれ？何見てんの？噂のＨＰは？」
圭吾はＰＣのモニターを見ながら、聞いてきた。
「まだＨＰは探してないよ。今は噂の元になった事件や事故を…」
「そんなのどーでもいいから、ＨＰを探してくれよ。」
「いや、でも…」
「いーからいーから、ＨＰ優先で夜露死苦。」
ま、圭吾がそういうのなら噂の真相よりＨＰ探しを優先しようか。
僕としては、真相の方が気になるけど。

結局、その日は噂のＨＰは見つからず僕は帰路に着いた。
なにかヒントでもあればいいのだけれど…。
僕は空を見上げた。
今夜は満月か。

ナンパ？いえ、調査です。

「明日9時に集合」

昨晩、家に帰る前に圭吾に言われた。
「集合」といっても集まるのは僕と圭吾の2人だけだし、僕が圭吾の家に行くだけなので、実際のところは「明日9時に来い」という意味だ。
基本的に僕たち2人の集合場所というのは圭吾の家だ。
理由はいくつかあるけど、1番大きな理由は「めんどくさい」からである。
念のためだけど、この「めんどくさい」発言は圭吾だ。

断じて僕ではない。

そして今、時間は午前9時。
時間通りに圭吾の家に着き、呼び鈴を鳴らし、圭吾の親に出迎えられ、圭吾の部屋に上がった僕は何をしているかというと

「罪人には贖罪を」

人を呼んでおいて、寝息をたてながら呑気に寝ている圭吾に、このまま安らかな眠りをプレゼントしてやろうか、どうか悩んでいる最中だった。

ホントにこいつ、何様だよ。

でも、さすがにこの年で犯罪者にはなりたくないので、ここで僕がとれる行動は

1．アグレッシブに起こす
2．ファンシーに起こす
3．一緒に寝る

3は無いな。ありえない。ってことは1か2なんだけど…。
うーん、1でいいか。

「ちぇりおー」

圭吾の頭をスリッパで叩いてみた。全力で。
スパーッン！と快音は響かず、バコンっと鈍い音がした。
あれ？もっといい音がすると思ったんだけどな。これはまた随分と、しょぼくれた音じゃないか。叩き方が悪かったのか？角度？力加減？それとも、圭吾の頭が悪いのか？
しょぼくれた音の原因を考えていると、

スパーッン！と快音が響いた。それと同時に頭に衝撃がはしる。

うぅ、痛い。

「いきなり何してくれるんだよ！」
「それは、こっちの台詞だ！」
「こっちで、いいんだよ！」

どっちの台詞でもよかった。

それにしても、いい音がしたなあ。何が違ったんだろうか？

「さぁ、行こうか。」

準備を終えた圭吾が、僕にバイクの鍵を渡しながら言う。

「行くのはいいけど、どこに？」

「海だよ、海。海でナンｐ…き、聞き込み調査をするで、ご、ごすよ。」

ごすよ？ごすよってなんだよ。今噛んだだろ。なあ？なあ？なあ！？

え？なに？キャラ作りでもしてんの？ごすよって何キャラ？

流行ってんの？流行ってんの？ねえ？ねえ？ねえ！？

っていうか、今ナンパって言いかけただろ。

「…早く行こうぜ。」

「いや、もう少しいじらせてくれ。」

「勘弁してくれよ」圭吾はそう呟いた。

ははっ、超楽しい。

その後、適度にいじり僕は圭吾のバイクに跨り、圭吾を後ろに乗せ海を目指した。

海に着いた矢先、圭吾は「波が俺を呼んでいる」など訳のわからないコトを言いながら、ヘルメットをこっちに投げ渡し走っていった。

元気だね～。僕はこの海臭さにげんなりしているというのに。

正直言って、僕は海が嫌いだ。理由はこの臭いだ。何がいいのかわからない。

「帰りたい」僕は1人呟いた。

しかし、圭吾1人を置いて帰るわけにも行かないし、どうしようか。

適当に歩きながら考える。

なんとなく空を見る。今日も暑いな。

赤と青

暑い、熱い、厚い。
ダメだ、どれが正しい感じか分からない。頭が廻らない。
くそ、なんで海なんかに僕は着ているんだ。
あの馬鹿のせいだ。
何か詰めたい物はないか。

当たりを見渡してみると、生温い風に揺れる「氷」の文字をみつけた。
氷…氷…氷…
引き寄せられるように僕は歩きゅ。

あそこには最高でも0℃の食べ物があるんだ。
今の僕のには、あの「氷」の文字がオアシスに見える。
ふらふらと歩く僕を急に熱波が襲う。

おい、やきそば屋あちぃぞ。空気読めよ。こんな暑い日にそんなモンが売れるわけねぇだろ。頭使えよ、頭。横の氷が溶けるだろうが、おい。もし溶けたら責任とれよ。

やきそば屋を睨みながら、カキ氷を注文する。さて、シロップは何にしようか、無難にいちごでいい気もするけど、たまにはメロンとかレモンもいいかもしれない。そういえば、ブルーハワイって食べたことないな。うん、せっかくだ、今回はブルーハワイにしよう。
「いちごのカキ氷1つください」

店主とおもわれるおっちゃんは「あいよ」と、それだけ言いカキ氷を作り始めた。

あれ？僕は今なんと言った？いちごって言わなかったか？
今回はブルーハワイにしようと決めなかったか？
ダメだ、暑さで脳がとろけてる。

おっちゃんの方を見る。砕いた氷にかけようとしているシロップの色は

赤だ。

やっぱり間違えて、いちごを注文している。いや、まだ間に合う。
まだ、シロップはかかってはいない。今なら変更がきくはずだ。

「すいません、やっぱりブルーｈ…」

真っ白な氷が綺麗な赤に染まっていた。間に合わなかった。

仕方なく代金を払い、いちごのシロップのかかったカキ氷を受け取る。
いいさ、慣れ親しんだモノのほうが安心して食べれるもん。
全然、気にしてないもん。

二口、三口、食べたところであることを思い出す。
僕はカキ氷が嫌いだったことを。

これ、冷静に考えたらただの氷じゃないか。「いちご」のシロップっていったってイチゴ味じゃないし。ただ、赤いだけだし。どうせ、水道水を凍らせただけなんだろ？どこかの天然水とかじゃないんだろ？なんで僕はこんなモノを買ってしまったんだ。

ムシャムシャしてやった。後悔はしてる。

くそ、頭が痛い。手も冷えたし、最悪だ。口直しに何かないか…。

焼きそば、うめぇ。海で食べる焼きそば、マジでうめぇ。あそこの店員、ホント空気読んでるわ。頭良すぎだろ。最高だよ。

バイクの見える適当な場所に座り、焼きそばを食べながら圭吾を探してみるが見当たらない。

ホントあのバカ、僕を1人置いてどこに行ったんだか。

あの噂話のコトはもうどうでもいいのだろうか？それとも本当に聞き込み調査でもしているのだろうか？ありえないな。今回はただのナンパだろうな。毎年恒例の。

焼きそばも食べ終わり、ボンヤリと海を眺めていたら

「ねぇ、今日1人？」

「なにしてるの？」

話かけられた。振り向くと水着姿の女の子が2人。もしかしてこれは、あれか？ナンパか？それとも、カツアゲ？美人局？

少し身構えながら「はぁ」とだけ答える。こういうのは苦手だ。
その後も色々と話しかけられるがすべて適当に返事をする。

「ねぇねぇ、名前は？」
「望月（もちづき）」
「へぇー望月かぁ、下は？」
「…千里（ちさと）」

僕の名前を言うと女の子は「かわいい」とか「女の子みたい」とか言う。
これだから、名前を言うのは嫌いだ。なぜ親はこんな名前をつけたんだ。

いつもどおりの展開に嫌気が差しながら、空を仰ぐ。

圭吾、早く帰ってきてくれ。

あれは事故だよ、事故。

「ち～ちゃん」

名前のことでウンザリしながら、適当に女の子たちと会話しているといきなり後ろから抱きしめられた。

「なに女の子たちとイチャイチャしてんのかな？俺というものがありながら、ホントご機嫌だねぇ。ちょっと妬けちゃうぞ」

お前誰だよ！！半端なくキモイよ。

「ほら散った散ったぁ、俺と千里のイチャイチャパラダイスに女は必要ないんだよ」

そう言われた女の子たちは、渋々と僕たち2人を睨むように去っていった。でも、僕は見逃さなかった、片方の女の子がどこか期待に満ちた目をしていたコトを。

腐ってやがる。

しかし、いつまで抱きついているんだ、こいつは。

「圭吾、助けてくれたのはありがたいんだけど、もう少しマシな方法はなかったのかな？」

首に巻きついている腕をほどきながら、そう訊ねる。

「ん？無くは無いけど今回はアレが1番だったと思うぞ。ほれ、向こう見てみ」

圭吾が指を指した方を見てみると、さっきの女の子たちがガラの悪そうな赤い集団と話していた。ナンパされてる感じではなく、知り合いのような感じで。時折、こっちを見て睨んでいるような気もする。

やばっ、今目が合ったかも。

「あれ赤絨毯(レッドカーペット)だろ？たぶんあの女、美人局じゃねーの」
赤絨毯(レッドカーペット)…この街にいるカラーギャングのひとつ。カラーギャングは昔、小説だかドラマだかの影響で爆発的に増えたみたいだけど、時が経つにつれて衰退していった。この街ではある意味レアな存在。暴走族とどっちが多いのだろうか。
さっきのが本当に美人局だとしたら、圭吾の判断は正しかったと言える。かなりヤバイ集団らしいから、あいつら。下手に追い返すより、あぁやって去っていってもらった方が安全な訳だ。
そういえば圭吾は、前に揉めたコトがあるって言ってたっけ？
っていうかあの女、さっきからチラチラと期待に満ちた目で見てくんじゃねーよ。そんな趣味ないから。

「で、ナンパの方はどうだったの？」
「全然ダメ。どいつもこいつも人の顔見ると適当な言い訳して逃げていくんだよ。どういうコト？」
「その眼つきと傷のせいじゃないかな」
圭吾の眼つきはかなりキツイ。顔は悪くないんだけど、眼つきが非常に悪い。おまけに顔に傷がある。そのせいで、普通の人は道を譲ってしまうレベルの顔だ。
顔の傷は昔事故でどーたらこーたら…。
「傷をつけた本人が何を言うか。責任とってくれよ」
「責任も何もアレは事故だって」

うん、アレは事故だ。僕はナニモシテナイヨ？
それと、さっきの女がすごいキラキラした目でこっちを見ている気がするけど、気のせいだよな。

「もう、今日は帰ろうぜ。赤いのが多すぎてうざったいし。駐車場の段階で気づくべきだったな」
そういえば、赤い車がたくさん停まってたな。あれが全部そうだとすると、かなりの人数がいる事になる訳か…。確かにうざったいな。

あっ！！僕が間違えてイチゴのカキ氷を買ってしまったのは、そのせいか。くそっ、赤絨毯め憶えてろよ。

駐車場に停まっている赤い車を睨みながら、バイクのエンジンをかけヘルメットを被ると既に圭吾はシートの後ろ側に座っていた。

圭吾、邪魔だから、先に後ろに乗らないでくれ。後ろって字は「あと」とも読むんだぞ。

仕方が無いので僕は、圭吾に当たるように回し蹴りよろしく足を上げ、バイクに跨った。僕が跨ったと同時に圭吾が落ちた気がするけど気にしない。

「ほら、早く乗ってよ」
「お前何してくれんだよ！ぜってぇわざとだろ。もう少しでマフラーに当たるトコだったぞ」
「いやいや事故だよ、事故。僕がそんなコトするわけないじゃん」
「いや、絶対わざとだ。昔、俺を階段に突き落とした時もそう言ってたじゃねーか」
「ヒドイナー、アレモ事故ダヨ。」

「この嘘吐きが」圭吾はそうボヤキながら後ろに乗りなおす。人を嘘吐き呼ばわりするなんて、なんてヒドイやつだ。

圭吾が後ろに乗ったのを確認し、スタンドを払いギヤを1速にいれ、そして

クラッチを一気に繋いだ。

後ろから「うぶぁっ」とか、間抜な声がした。ははっ、僕を嘘吐き呼ばわりした罰だ。

圭吾の家に着いた時には圭吾は疲れきっていた。まぁ、あれだけ叫び続ければ疲れるのも仕方が無い。

しかし、バイクの後ろで怒鳴りちらす圭吾、その声を無駄にアクセルを吹かしてかき消す僕。周りから見た人はどう思ったのだろうか…、DQNだよね、やっぱり。

「あぁ、無駄に疲れた。もう俺は寝る」

「もう寝るの？早くない？」

「夜にまた、出掛けんだよ。千里も今から寝とけ、たぶん日の出を拝むことになるから」

日の出って、一体何をする気だよ。危ないコトは勘弁願いたいんだけど。

何をする気なのか訊こうとした時には、既に圭吾は寝ていた。いや、あんた寝るの早すぎでしょ。どんだけ寝つき良いんだよ。

ため息をひとつ吐いて、僕はソファーに横になり目を閉じて、今日1日のコトを思い出す。

何しに海に行ったんだっけ？

「おい、起きろって。早く起きないと、その寝顔を写メってあいつに送るぞ」

「それだけはご勘弁を！！」

圭吾のこれ以上ない脅しに、僕は飛び起きた。

「やっと起きたか。相変わらず1度寝るとなかなか起きないな。まぁいいや、ほれ行くぞ」

「え、あ、うん」

圭吾は僕の手をつかみ、無理やり僕の体を起こす。

「で、どこに行くの？日の出って言ってたけど遠いの？」

「いや、今日はその辺をプラプラするだけかな？時間にもよるけど」

「プラプラして、何するの？」

「あ？あー、その辺は歩きながら話すわ。とりあえず行こうぜ。俺の予定の時間からかなり押してるし」

時間を確認する。22時36分。良い子の僕は寝る時間じゃないか。僕はソファーに横になり、目を閉じた。

「寝るんじゃねーよ！！」

圭吾はそう言って僕の頭をスリッパで叩く。

相変わらずいい音させるな、ホント。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5737r/

SSW　Vacation

2011年10月8日20時28分発行